スウェーデン便り（19）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝2000 年 5 月 16 日

［本文］
　脳が溶け始めていた。
　一週間続いたコンピューター講座は、私からエネルギーを吸い尽くし、代わりに体のあちこちに痛みの塊を注入して去った。
　指先の軽いクリックで、思わぬものが飛び出してくる。それは確かに面白く、時を忘れる。だが、ただ座っていただけなのに、なぜこのように疲れているのだろう。少なくとも、体中の汗を絞りきった後のさわやかさからは遠い。眼球が引きつけを起こしている。
　ソファに深く横たわり、マリー・ボイネの音楽に身を浸す。サーメの人々の国土・サプミの風がにおってくる。
　「美しいサプミを闇（やみ）がのみ込む。朝が来る、それとも来ない？」
　煮えた脳を冷ますには、ふさわしくない歌かもしれない。引き裂かれ、重く沈んだ歌声は、分断された祖国を映し出す影とも見える。
　トナカイは、トナカイ自身の国境を持っている、と低くうめいた人の顔を思い浮かべる。
　明けない夜と血なまぐさい朝とのすき間に、バラ色の約束が可能だろうか？
　マリー・ボイネ、あなたが繰り返し歌う、星や月や太陽は、今は暗く、にび色に輝いている。
　ラップランドで写真に撮ったサプミの国旗は、現像してみたら消えてしまいました。
　トナカイは、人がつくった国境という柵（さく）の中で、いまだしばらくは、ぐるぐると回り続けるしかないのかもしれない。
　二日間、何もしないでマリー・ボイネの歌声に抱かれていた。
　次の週、手漉（てす）き紙の講座が始まった。目や右肩、腰のあたりに鈍痛が残っていたので不安だった。神埼のフクナリさんの工房では、コウゾの繊維をほぐすために、木槌（きづち）で何百回も繰り返し叩（たた）いていた。それと似たような作業から始まるものと思っていた。
　ところが、まるで違う。素材は木の薄皮などではなく、既に加工されたリンドスというコットン・ファイバーで、どう見ても厚手の紙にしか見えない。それをちぎって機械の中で水に溶かし、膠（にかわ）や、ビーキャボナットというケーキを作るときに入れるふくらし粉のようなものを入れたら、二時間弱で紙漉きの材料は出来上がる。

自然素材の持つ不可思議に出あうというアプローチではない。出来上がった原料に草花や色糸や金属など様々な素材を漉き込み、更に色を加える。紙という素材を使って、アートを作るという方向性である。

私は写真や磁器土などを漉き込んでみたが、フレデリックが縄をたくさん取ってきて漉き込んだときには、あきれてしまった。

色はテキスタイルの染料と同じものなのだが、これも自然素材の優しい色合いのものではない。

紙漉きも、私には消化不良に終わりそうである。この週末もマリー・ボイネと過ごすことになるのだろうか。

＊

《注》マリー・ボイネ＝ノルウェー北部出身のサーメのミュージシャン